

私のシベリア抑留

地獄の底を這い回った四年半

石川県 前多義雄

はじめに

私の二十歳代の青春は、大東亜戦争勃発と同時に現役入隊して四年間の戦場、引き続きシベリア強制労働四年半で全てが終わった。息子や周囲の人達からは自叙伝でもと推奨されるが、とうていその気にはなれない。年も八十歳に近づいていよいよこの世からおさらばする身になった。今般、前世からどんな業縁で結ばれていたのか、奇しくも戦場やシベリア抑留で生死苦楽を共にし、この六十年間、兄弟の付き合いをしていた戦友Y君から「腹にあるものを吐き出して来たれ」「憤死した戦友達の無念を想起せよ」「戦いに負けたらこんな悲惨な目に遭うのだと、平和の尊さを次世代に引き継ぐのが生き残った者の責務ではないか」と

論され、今さらに、恥も外聞も投げ捨てて事実そのままを素朴に語るのみと、敢えて重いペンを執ることにした。

何分にも五十数年前の事象であるので、話の前後やほんやりして思い出せない部分も多い。ただ、これだけは未来永劫、絶対に忘れることのできないものに限定して、その幾つかを断片的に書き綴ることにしたい。

一、終戦時の満州のこと

私達の部隊は日ソ開戦の一カ月余り前に、急ぎよ中支那の戦線から満州西部国境に移動して来た。当時の日本軍は主力を中国や南方、さらには沖縄、太平洋諸島にと分散し、ソ連とは中立条約による友好関係にあったので、満州における警備は至って薄く、ドイツ降伏後の大軍を突如極東に増派して来たソ連軍に比し、余りにも貧弱であった。私の部隊は、開戦三日日には戦線を縮小して南進し、奉天（瀋陽）付近で一大決戦をするのだと転進命令が出された（実際は退却だが当時は転進と言った）。

八月十三日、南満州鉄道の本線にある四平街に出て驚いた。新京（長春）、ハルビン方面の国境地帯から避難して来る無蓋車は、満杯の婦女子で満ちあふれている。ソ連兵が攻めて来る、現地満人が暴行略奪、火を放つ、この阿鼻叫喚はまさに生地獄である。日本の敗北を早くも察知した（米軍は日本敗北のニュースビラを空中散布していた）満州新聞には、「吸血鬼日本人」との見出しが大きく掲げられた。昨日の友は今日の敵、現地人と日本人の立場は一瞬にして逆転した。

近くにいた将校が私に耳打ちした、「どうも戦争は負けたらしい」と。そんな馬鹿なことがあるものか。私の頭が固いのか、それとも軍国主義教育がなせるわざか。十五日昼過ぎ、奉天駅に到着、ここで玉音放送を知ったが、ショックのためか涙も出なかった。落ちて着いて来ると、ポツダム宣言受諾により日本軍隊は武装を解除された後、郷里へ帰り各自の正業につくことになった。そして復員は向寒の折柄、寒い所から優先されると政府発表があった。やっぱり人間とは最後は自己中心の本能に帰るものなのか、ホッととして、これ

で日本へ、そして懐かしい親兄弟の顔が見られるとの喜びいっぱいである。顔にこそ出さぬが、皆がそうだったと思う。あとは銃を塩水に漬けて床下に隠す。でも万一に備えて若干の銃剣は手元に残した。しかし、ソ連軍部隊が奉天市街に進駐して来たのは一週間以上も後のことである。

前線から奉天付近に集結して来た部隊間の連絡を密にしなければならぬ。また十八日には竹田宮が、関東軍を説得するために天皇の御名代として奉天に来られるという。軍司令官直属の通信隊である私達は忙しくなってきた。私達の分隊（六〇七人）で、私は分隊長の陸軍軍曹だった）は早速、別命により数日間、架線作業に奉天を離れた四十〜五十キロメートルの所までに被覆線（通信線）を敷設した。作業中、遙か市街地を見ると、真つ昼間だというのに、陸軍病院あたりから火の手が上がり炎が見える。満人がこの際というところか、日本人からかっぱらったもの……白く見えるのは敷布で何でも包んだものか……を荷馬車に積んで逃げるのがわかる。私は思わず「この野郎ども！」と叫

んで何発かの威嚇射撃を行った。彼等が一目散に逃げ
る様子に胸がスーッとしたが……。

また、こんなこともあった。移動中に完全武装した
十五、六人の満軍と出遭い、衣服、下着、それに私が
背負っていた軍刀までも略奪された。手ぶらの私達に
はどうすることもできなかったのである。軍刀だけは
武士の魂、何とか取り返さねばと一計を考え、満軍兵
に「向こうにはまだまだ沢山の品物があるから待って
おれ」と言って、うそをつき、隠し銃を持ち出して銃
撃戦になった。敵は逃げる。私達は追う。私は軍刀を
取り返して振り回しながら追跡した。負傷して倒れた
敵兵の喉元を軍刀で突き刺した。結果は、敵は死骸二
を残して退却。我が方には損害はなかった。この事件
はこれ以上の詳細を語ることはできない。ただ言える
ことは、人間は、かかる時には我を忘れ、鶏や犬猫を
殺すのと変わりなく、狂気じみて何の抵抗感もないと
いうことである。合法的殺人である戦争とはこのよう
なものである。こうしなければ自分が殺される。
戦争の悲惨さはここにある。

二、シベリア強制労働の

地上作業から炭坑へ追放

だまされだまされてソ連邦カザフスタン共和国カラ
ガンダ市付近（ソ連屈指の炭坑の町である）に着いた
のは終戦の年の十一月二日早朝である。一年の半分が
零下数十度というこの地は、もう凍結した湖上をト
ラックが走行している。私達日本人千五百人は市郊外
の捕虜収容所で、これからこの小都市へ建設土木要員
として投入されることになった。仕事は採石と道路建
設の野外作業等である。昭和二十（一九四五）年の冬
は極寒と飢餓と栄養失調、それに作業中の事故によっ
て多くの日本人が凍土の異国に斃れた。それはまさに
人間としての極限状態だった。これからどうなるのか
見当もつかない。「昔から、鉄のカーテンたるソビエ
トに入った者はいても、出て来た者は一人もいない」。
正義は必ず勝つと信じて来た私だったが、こんな嘘
つきの卑劣者の国に負けるなんて神も仏もあつたもの
ではない。えい！ ままよ……私は何度胸を決めた。
よーし、雑草となつても徹底的に反抗してやるぞ。三

男坊の「いらんこ小与門(子だくさんの貧農では三男、四男ともなれば、この子は必要のない、要らない者としてこう呼んだ)」では、死んでも涙を出してくれる者は誰もいない。氣丈な男勝りの母は、出征するとき「義雄、お前はお国のために死んで来い。骨はおつかあが拾ってやる」と涙一つ見せなかった。私がソ連の捕虜になったことを知ったら「このダラ!(馬鹿のこと)、金玉かっ潰して死んでしまえ」と嘆くだろう。こんな悪の固まりソ連のために断じて働くもなか。第一、鶏に食わすような餌を少し与えただけで働けなんて無茶苦茶だ。私は徹底的に仕事をサボった。警戒兵が怒って銃口を鼻先に突きつけ、引き金をガチャガチャ言わせたこともあった。そんな時は座り込んであぐらをかき両腕を組んで「さあ殺せ!」と怒鳴った。私は背は小さいが声だけは母親譲りで大きかった。しかし「働かざる者は食うべからず」、ソ連当局は日本人捕虜の旧軍隊組織をそのまま認め、小隊長、大隊長の将校に、もつと働かせ、もつともつとと圧力をかけて来る。小隊長は学徒出陣の氣の弱いヒョ

ロヒョロの臆病者である。ロシア監督から強く言われるとおどおどして、兵隊に気合いを入れて仕事をせよと追い立てる。「日本人のくせにロシア人と一緒だ」、兵隊からも評判はよくない。小隊長代理でもある私は全く言うことを聞かない。私が言いつけたわけではないが、私がサボると兵達も一緒になってサボる。小隊のノルマはさっぱり上がらない。中隊長や大隊長から詰問されると、前多が煽動するのだと逃げる。

翌年の初夏のある日だった。この收容所から二十数人が炭坑行きになった。我が中隊からは親友のK軍曹と私と二人が選ばれた。K君は入隊前は京都丹波国の田舎役場の蚕ひこうりょうの先生として農家を巡回していた。飄々とした人格で物事にあまりこだわらない好人物である。彼も農家の次男坊で、中国戦線で一緒になり、境遇が全く類似していたのですぐ友達になった。彼には氣の毒なことになった。一人ではかわいそう……と中隊長は彼を前多に同道させたのである。炭坑行きは一日の労働が終わった解散時に発表され、直ちに夕食後出発させる。K君は当日は発熱し入院、三十

八度で休務中だった。ひどいことをしやがる、命令なら致し方がない。千五百人の中から悪たればかりが選び出されたのだ。小隊長の奴は四国出身と聞か、もし帰国できたらあの野郎、草の根分けても探し出し仇を取ってやろうと誓い合った。人間とは面白いものだ。四年余後、帰国する頃には「帰れるだけで良いではないか、そんなことは放っておけ」となった。私より二歳若かった彼は今ごろどうしているか、捜すことすらいやである。とにかくここでの地上勤務は一年足らずで、それから帰国までの三年半は炭坑夫となった。

三、炭坑は口論と喧嘩の修羅場

選ばれた二十数人はさすがである。やくざ者や親子分などそうそうたる面構えである。だが、二十余人はばらばらにされて分散配属になった。

炭坑内作業には採炭係と運搬係がある。最初はこの採炭係になった。ここで炭坑内の仕事の順序等を簡単に説明したい。坑内に入るの一日のうち朝・夕・深夜の三交代勤務である。入坑する時は傾斜坑内を歩い

て二キロメートルほど進むと現場に到着する。ここではベルトコンベアが回っている（スキー場のリフトのようなもの）。これに数メートル置きに一トンのワゴン車が載せられている。往のワゴン車は空、復は石炭を山盛りにする。採炭係はここで固い坑内帽（この上にランプがある）を被り、または手提げランプを持って真っ暗闇の横穴に進み、ここでまずブリ（電気モーターの錐）で細長い穴を開けて、爆薬を仕込んで爆破させる。崩れ落ちた石炭をスコップでワゴン車に搭載してワゴン車を押し出す。これにはノルマがあつて一日に何百台が一〇〇%となる。

また、運搬係はこの終点でワゴン車を載せたり降りしたりする。これには相当の腕力が必要であり、熟練しないと線路のレールから外れて危険である。私はこの採炭係を一年ばかりした後は運搬係に回された。

カラガンダには数十の炭坑があり、日本人捕虜は一万人以上はいたのではないか。そして私の収容所では最初は四中隊（採炭夫）であった。とにかく私は荒れていた。ヤケクソだった。望みも何もない、どうにで

もなれの心境だった。同僚やロシア人と頻繁に喧嘩をした。當時を想起すると、多い時には週四回を数えた。日本人同士がなぜ喧嘩になったのか今でも分らないが、四中隊は島根、鳥取両県の兵隊が多く、彼等は一年前からの先輩格として私を差別したと感じた。

喧嘩するのは交代時の坑道中である。とにかく新参者としてなめられたことで売り言葉に買い言葉である。しかし、日本人同士ということもあって、手をあげることは僅かで、口論の類が多かった。

ただし、ロシア人との喧嘩は真剣だった。彼等はヨーロッパからシベリアへ流刑になったならず者が多い。このソ連兵たちと「貴様らに負けてたまるもんか」と、すぐ取っ組み合いになった。その一、二の例を述べれば、パッサン（若者）と二人で仕事をした時、たまたま、ヤポンスキー（日本人）が強いが、ロシア人が強いかの口論になり、それならお前と俺で決着をつけようと組み討ちになった。二人だけで泥水の粉炭の小川の中で上になり、下になり、ゆうに三十分以上の格闘になった。そのうち二人とも同様に力尽

きて戦力はなくなり、とうとうどちらからともなくやめてしまった。それからソ連監督キリイシとの殴り合い。監督はプリンシキーも兼ねていた。プリンシキーとは、坑道の中に一メートル間隔で木材で鳥居方式の坑木を組立てる仕事。常にマサカリと鋸を持参する。喧嘩の原因は何のことはない、早く仕事をしろというのが発端だった。

採炭夫は流しコンベアが動く仕事をしなければならぬ。コンベアは、縦坑、横坑、そして採炭する所は横坑のまた縦坑で傾斜をつけ、コンベアの上下運動によって石炭が流れる仕組みである。前述の如く、石炭は壁の横坑をブリで二メートルほどの螺旋の穴を開け、火薬を詰めてハッパをかけ電気で爆発させる。爆発とスイッチの距離は三十メートルほどである。何かの理由でコンベアが止まる。そうすると採炭夫は休憩になる。この日は私も体の調子が悪く働くのが嫌だった。コンベアが止まったので、その場にべたり座り込んでウトウト眠ったようだ。コンベアが動き出した。突然監督のキリイシが「ソルダート（兵士）、起きろ」

と大声で怒鳴りながら私の足を蹴り上げた。日本人には足蹴りされることは最大の侮辱である。この野郎と腹が煮えくり返るが所詮は捕虜の身、歯を食いしばって我慢した。ところがである。今度は石炭をスコップでコンベアに積載している私の背中を早くしろと小突いた。さあ堪忍袋の緒が切れた。手にしたバッテリー（ランプ）をキリイシのすね目がけて叩きつけた。興奮したキリイシはそのランプを拾い上げて私に襲いかかり右眉のあたりを切った（後に医務室で二針縫った）。顔は血だらけ、相手も足を怪我している。でも二人は殴り合い取っ組み合いである。三十分も揉み合っていたらどうか。スメナー（分隊）の連中が気づいて分けに入った。収まらないのはキリイシである。「処罰だ、処罰だ」と叫び続ける。結果は明瞭である。他の特別収容所へ追放か、営倉入りか、何人かの前例を知っている。私はここから絶対に地上には上がらないぞと座り込んだ。その時にはもう三、四人のロシア人も集まっていた。もしどうしても上げたいのなら、貴様等ロシア人が俺を担いで上げろと拗ねた。

この結果は大きな問題になった。その晩ラーゲルの会報板で、ロシア人に対しては絶対に手出ししてはならない。当然、強制労働や食物の仕返しがある。ロシア人の感情を悪くすることは厳禁する……予想に反して何の処分もなかった。それは私も大怪我をしていたためか？　しかし、彼等のブラックリストには何と書かれたのか、これが私のダメイを遅らす大きな原因であり、後述するが、引揚船の棧橋でストップになった理由でもある。

四、つるし上げと共産主義への洗脳

ある日炭坑から上がって来たら「別室に来い」と言う。入室すると、私を真正面の真ん中に座らせ十四、十五人がぐるりと取り巻いた。早速つるし上げである。あんたはまだ親ソ的でなく労働も理解していない等々、さんざんである。

これには、前日のソ連革命記念日（十一月七日）にウオツカが少々配給され、いささか酔っぱらった時に歌を歌えと強要され、調子に乗って何曲か歌った。その歌は「下田夜曲」等々退廃的なものばかりだったと

言うのである。そのことについての切り出しは、俺達は今、ソ同盟のために増産に努め、より多くの石炭を運び出したい、ソ連当局から褒められたいのだ、これは結局待遇改善につながり、多くのパンにありつけるのだ、あなたはそんな歌を歌うようではブチブル（小ブルジョア）で社会主義の心ではない、言わばソ同盟に対する忠実・忠誠心がない証拠であると言う。その頃ハバロフスクで発行される『日本新聞』では、増産運動を奨励し民主化を叫んでいた。私は反論した。

「お前等は何を言うとするか。軍隊では軍国主義を謳歌していたのに、僅か一年半足らずで今度はソ同盟万歳！ スターリン万歳！ とはどういうことか、その心変わりには甚だしい」と反発した。彼等は私の過去まで洗い出して追及する。そして三日三晩（夕食後の一九時～二二時までの三時間）つるし上げられたが、私は屈することはしなかった。

その頃だった。親友のK君が落盤事故で生き埋めになり、掘り起こして息を吹き返したが、両足を大怪我して足が不自由になった。彼はその後退院して食堂係

になった。これが私には大福音になった。即ち、彼は毎晩の夕食券の一枚を危険を冒してちょろまかしてくれる（判明すれば大変）。私は二人前を食って満腹、元気はつらつである。お陰で体は肥えて毎月の身体検査はいつもアジン（一級）であるが、仕事は最も辛い重労働に回された。

そのうち体の弱い者の帰国がポツポツ始まり、ダモイが現実化してきた。「ダモイはハラシヨラポート（労働能率のよい者）から、民主化運動を積極的にした者からが順番でダモイする」と言われるようになった。周囲の友達から「前多！ お前は偉そうなことを言っているが、日本へ帰りたくないのか。帰国してこそ命冥利というものだ」と言う。私も、こんな所で犬死にしたくないのは当然のことである。ここは酔った振りをするのが良いのかも知れない。アクチブに勧められて民主化講習を受けることにした。これは各隊から二十人くらいを集めて行う二カ月間の集合訓練である。帰国した後、共産主義とはどんなものかを知ることとあながち無駄ではないだろう。講習会に参加して

みると、テストもあり、いろいろ詰め込まれた。学習の中味は何のことはない、経済学からソビエト共産党史の解説、マルクス・レーニン主義礼賛、その他資本論の勉強である。一日二時間、二カ月間の講習を終わって帰隊したら、どうしたことか、最後の修了試験は良かったらしい。突然、中隊の文化部長、青年行動隊長、そして政治サークルの講師という三つの大役を仰せつかり、真面目にその任務を全うしたが、「人間万事塞翁が馬」と言われるが、これが逆作用したのか。

抑留生活二年半ごろから何回かに分けて帰国することになったが、その選別基準は、①親ソ的でリーダーである者 ②勤労意欲があつてソ同盟の増産に協力した者 ③不具廃疾及びこれに近い者等々である。足が不自由になったK君はこの③により昭和二十三年初夏に帰国した。別れに際し「前多、余り無茶するなよ、一足先に帰って家族にもよく伝えておくからな、くれぐれも体を大事に、では次は日本で会おう……」。越冬四年目を迎える二十三年暮にはもう半数以上が帰っ

てしまった。無二の親友が去り、遠い異国で深夜の月に向かつて何度、男涙を流したことか。さあ、こうなったら何のために前記大役を一生懸命やったのかわからなくなった。アクチブと称するAに聞きただした。「何で私が帰れないのか」。彼いわく「そりゃ、あんたを帰したら指導者がいなくなるからだ」と言う。

五、カマンジール（日本人の監督）として

四中隊（採炭専門）から六中隊に移動して日本人カマンジールになった。この職は選挙によるものである。将校を追放しても、旧軍隊の初年兵や一等兵ではやはり無理である。結局下士官クラスが務めることになる。私は周囲から推薦されてこの役についた。しかし、これは名誉職ではない。かえって従来以上の重労働になるのである。前述したが、二キロメートル先の地下の炭坑での掘削方法は、ちょうどムカデに似た方法である。まず縦坑で斜めに地下へ↓それから各段が左右に横穴を掘る。縦坑はケーブルで地上へ石炭を上げる↓ワイヤーで一つ一つのワゴンを絡みつけて、数メートル間隔くらいにワゴンを吊るして順次地上へ↓

地上では一トンワゴンをひっくり返す機械があり（これがまた大変な力仕事である）二、三人で次々に上がってくるワゴンをバラン（引っ掛ける鍵）を外し、外したワゴンを機械でひっくり返す……。次々上がって来るから、機械の動いている間は手を抜くことも力を抜くこともできない。

カマンジールはこの仕事を手伝って、ようやくリズムが出たところで、今度は坑道を降り各横穴から出てくるワゴン車を縦坑の機械にはめ込む仕事がある。これがまた原始的で、平板（鉄板の厚さ五〜十センチメートルくらい）上で横穴から来たワゴンを方向変換するのが六中隊の仕事である。方向変換は三人ですれば楽だが、二人では容易なことではない。これを半日または一日じゅう（八時間労働）人手の足りない組の手伝い。とにかくカマンジールは、困った部署部署の手伝いと全体（四十人程度）の作業員の管理監督（偉そうに言えば）が仕事である。

それから一番重要な仕事はナリアートをとること。ナリアートとは、A組ならA組の仕事、いわばその日

にやる仕事量（ノルマ）を工場長と入坑する前に決めることであって、これがソ連工場長の一番の仕事である。これを決めるのは勘であって、仕事場の状況（例えば、今日は石炭の量が良く、多くの採炭ができる等）によって、今日は二百〜三百ワゴン（トン）を出せという——こちらはなるべく仕事をしたくないのが本音で、三百ワゴン出せると思っても二百五十くらいしかできないと言う（これは前々の組から聞いて、これを基礎に折衝（交渉）する、これがカマンジールの大仕事。ソ連側は甘く見て余計働かせようとする）。

さて、交渉の場でのロシア人はこぶしを振り上げて大声で怒鳴る。こっちも、お前等になめられてたまるもんかの気持ちと、日露戦争では日本がお前らに勝たではないかの気概で私も大声を出して机を叩く。日本以外の外国人、特に欧米人は騎馬民族（肉食）の故もあってか、農耕民族に比し気が強い。カマンジールは日本人の代表なのだからその責任は重大である。私はこんなことを考えながら、何とか釣り合いをとってナリアートを決めていた。

話変わって、間一髪、死を免れた一つの事故を紹介したい。トロッコがレールから脱線すると、これをレールに載せるのは大仕事である。坑木とワゴンの間に入って、背中でワゴンを、足は石炭の壁に、そして力で後輪と前輪を交互に乗せて正常に戻すのである。

ある日のことである。私がワゴンと坑木の間に入り乗せようとした時、機械が動き出した（機械が動けば体が潰れて干しイカかみたいになる）。この時だけはこの世の終わりのかと思った。頭の中が真っ白とよく言うが、私の場合真っ暗で、そのうちに親・兄弟の顔が閃光のように過ぎ去った。幸いにもシグナルを押してくれたので機械が止まった。何回となく死機（死期ではない）はあったが、この時だけは一瞬、もう死んだと思った。九死に一生とはこのことか、あの時の記憶は絶対に忘れることができない。

六、絶望から光明へ（いよいよダモイ）

抑留生活五年目の冬を迎えた、そして九回の引揚同胞を見送った。もうこの広い炭坑にも日本人はまばらになってきた。何十回となくソ連にだまされだまされ

ここまで来たが、まだまだ帰れない、もうダメなのか。深夜交代で收容所を出る。凍りつくような夜空だが綺麗な満月である。「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」……ああ！ おつかあ！ 気の強いおつかあでもこれ以上の苦難に耐えることができるだろうか？ この四年有余は一日が一年に、一年は二十年に思われる……。

昭和二十四年も終わりに近づいた頃、いよいよラールを閉鎖して帰国の途につくことになった。これでもようやく祖国日本に帰れる。貨車でシベリア鉄道を横断して待望の港、ナホトカに着いた。ところが、日本から船が来ないと言う。先着組が数千人もいた。こりやまたどうなることか。それからの一週間は、ソビエトを讚える歌やアジテーションの場やら、数回の集會が行われた。反ソ的な者は洗い出され「つるし上げ」の集會である。思想的に改造されない者は再び奥地へ帰されると言う。現に帰国列車内で某准尉が勲章を持っていたとして、その場で帰国をストップさせられ下車したのを目撃している。数日が過ぎ、私達の乗

船が始まった。棧橋を渡る前で名簿に基づき名前を呼ばれて一列に並び順番を待つ。何百何十番目だったか、私が呼ばれて前に出て棧橋を渡ろうとすると、別の将校から「待った」がかかり、「お前は後だ」と引き帰させられた。その時の心境たるや、他人にはとうてい分かってもらえないだろう。だんだん心細くなってきた。そのうち乗船終了、私一人が残された。どうなるかとの不安はこの上なしである。そのうち将校連中が書類をめぐって話し合い、最後に「よし」の許しが出たが、棧橋の途中でまたストップがかからないか、早く船へと胸は高鳴る。船に足を一步入れた時の感慨は、筆舌に尽くし難いとはこのことであろう。船では、白衣の看護婦さんを初め医師、船員が出迎えてくれた。ああ、この方々は紛れもなく日本人である。この人達が間違いなく故国へ私を運んでくれるのだ。万感胸に迫り、涙がとめどなく溢れ先が見えなくなつた。

【執筆者の紹介】

前多義雄さんは大正十年（一九二一）年、石川県羽咋郡南大海村（現在の高松町）に農家の三男として生まれ、現在は金沢市末町に住んでおられる。

高松町は能登半島の首根つ子にある平和な寒村である。地元小学校を卒業すると村役場に就職した。一年後に青雲の志を抱いて名古屋へ。難関だった名古屋通信講習所を卒業して金沢郵便局勤務になった。それから郵便事業一本道を歩まれ、七尾、富山両郵便局長を経て金沢中央郵便局長を最後に退職。以後、二、三の関連会社社長等を歴任し、平成四年、勲四等瑞宝章を受章された。

軍歴は、昭和十七年一月、青森電信第四連隊に現役入隊。基礎教育が済むと満州牡丹江の電信第六連隊に配属。それから終戦までの四年間は、満州各地から中支那戦線を転々とし、終戦は奉天で陸軍軍曹で終わり、引続きソ連に抑留され、カザフスタン共和国の地獄の炭坑・カラガンダで苦勞されたことは本文にある通りである。

前多さんはまた、地域社会のため、金沢市における幾多のボランティア団体の役員、会長等に奉仕し、スポーツ界にも積極的に貢献され、いまなお雙鏢かくしやくとしてゴルフを楽しむほか、石川県カヌー協会等の役員として若人の指導に当たっておられる。

(石川県 山本 利男)

四年間のシベリア強制抑留回想記

石川県 通 実

北緯五十度線防衛

北緯五十度線国境を守護する要四二部隊は、対米戦に備え、太平洋沿岸東海岸、オホーツク海を軍備の重点目標にしていた。その一方で、間宮海峡を挟んで西海岸方面は、須恵取、真岡の二カ所に要四二部隊は対空監視所、重機関銃中隊が勤務していた。

日ソ不可侵条約締結の結果、軍備は手薄である。日本の戦局が敗戦近しと見るや、ソ連は日ソ不可侵条約

を破棄し北緯五十度戦を越境したのだ。火事場泥棒だ。濡れ手に粟に似たり。樺太防衛の軍備、兵員は南方方面に、北千島にと主力部隊が分散し、防衛が手薄にならざるを得なかったのだろうか。

昭和二十年八月十五日の終戦

終戦当日は普段どおり町民の方々の防空壕構築作業を指導していたが、昼食に帰った町民達が戻って来ない。不思議に思って連絡員を出すと、ラジオ放送で終戦の大詔が下ったとのこと、デマだと互いに論じたが会話にならない。部隊に帰ると、先ほど天皇陛下の玉音放送があったと言う。一瞬、頭の中は真っ白になった。その後二、三回空襲され、機銃掃射を受ける。民家にはちらほら白旗が立つ家が出始めた。

終戦後のいつごろか日付は忘れたが、旧樺太西海岸、須恵取町にソ連海兵隊の敵前上陸が開始された。我が方は対空監視の重機関銃一銃のみ、銃身が焼きつくまで乱射を続けたが多勢に無勢、援軍頼むと、我が落合駐留部隊に応援の要請があり、一部留守部隊を残して我々は間縫駅まで来たが、須恵取はもう駄目だか